

国際緊急援助

一つでも多くの笑顔を取り戻すために

JICAの国際緊急援助体制

JICAは、海外で大規模な災害が発生した場合に、被災国政府または国際機関からの要請に基づき、緊急援助を実施しています。支援の形態には、国際緊急援助隊 (Japan Disaster Relief Team: JDR) の派遣と、緊急援助物資供与の2つがあります。

JDRには、救助チーム、医療チーム、感染症対策チーム、専門家チーム、自衛隊部隊の5種類の援助形態があります。JDRについては被災国の要請に基づき、わが国の外務大臣が派遣を決定し、JICAが派遣の実務を担います。他方、緊急援助物資供与は、JICAが実施する活動です。

国際緊急援助隊事務局の業務

1. 国際緊急援助隊派遣

海外の被災地に対する緊急援助の実務を担うのが、JICAの国際緊急援助隊(JDR)事務局です。JDR事務局は、JDRの派遣が決定されると、隊員の選考、航空機の手配、携行資機材の選定など派遣の準備を行うほか、隊員が現地で円滑に活動できるよう、JDR事務局員等を業務調整員として派遣します。

代表的なチーム派遣には、救助チーム、医療チーム、感染症対策チームがあります。

被災者の捜索・救助活動を実施する救助チームは、国

際的な基準に基づいて世界中の救助チームの能力を評価する国際捜索救助諮問グループ(INSARAG)の外部評価において、最も高い能力を有する「ヘビー(重)」級チームとして認定されています。2017年9月に発生したメキシコ地震の際も救助チームが派遣され、夜を徹して捜索・救助活動を行いました。

医療チームは、被災国での医療支援を実施します。同チームは、2016年10月に世界保健機関(WHO)から、緊急医療チーム(Emergency Medical Team: EMT)としての国際認証を取得しました。また、2017年2月には、JDR医療チームが主導した災害医療情報の標準化手法「Minimum Data Set: MDS」が国際標準としてWHOに採択され、2019年3月にモザンビークで発生したサイクロン被害に対する国際救援において、JDR専門家チームの支援の下、初めて運用されました【→ P.59事例を参照ください】。

感染症対策チームは、国際的な感染症の流行に対応するため、2015年10月に新設され、隊員募集や研修を実施するとともに、コンゴ民主共和国における黄熱(2016年7月)、エボラ出血熱(2018年6月、2019年8月)の流行に対して派遣を行いました。また、2019年12月にはサモアの麻疹流行に対して派遣し、乳幼児を中心に重症患者の診療を支援しました。

2. 緊急援助物資供与

緊急援助物資を被災地へ迅速かつ確実に供与するため

日本の国際緊急援助体制



2019年度緊急援助実績 (2019年4月～2020年3月 計15件)

No	支援時期	被災国・地域	災害区分	援助区分	派遣人数・供与物資
1	2019年	4月 モザンビーク	サイクロン	医療チーム	24名(2次隊)
2	4月	イラン	洪水	物資供与	テント、プラスチックシート、スリーピングパッド
3	7月	コンゴ民主共和国	エボラ出血熱	物資供与	感染防護具
4	8月	コンゴ民主共和国	エボラ出血熱	感染症対策チーム	20名(1次隊7名、2次隊13名)
5	9月	ボリビア	森林火災	物資供与	消火活動用防護具
6	9月	バハマ	ハリケーン	物資供与	テント、毛布、プラスチックシート、ポリタンク、簡易水槽
7	9月	ブラジル	森林火災	物資供与	テント、スリーピングパッド
8	11月	ジブチ	洪水	自衛隊部隊	116名
9	11月	ジブチ	洪水	物資供与	テント、毛布、スリーピングパッド、ポリタンク
10	11月	アルバニア	地震	物資供与	テント、スリーピングパッド
11	12月	サモア	麻しん	感染症対策チーム	15名(1次隊4名、2次隊11名)
12	2020年	1月 オーストラリア	森林火災	自衛隊部隊	91名(C-130H輸送機 1機)
13	1月	オーストラリア	森林火災	物資供与	防塵マスク
14	1月	フィリピン	火山噴火	物資供与	防塵マスク、飲料水、発電機、コードリール、ポリタンク
15	1月	中華人民共和国	新型コロナウイルス	物資供与	感染防護具

に、JDR事務局は事前に物資を調達し、世界6カ所の倉庫に備蓄しています。2019年度は、火山噴火(フィリピン)、地震(アルバニア)、洪水(イラン、ジブチ)、感染症流行(コンゴ民主共和国、中国)、ハリケーン(バハマ)、森林火災(ボリビア、ブラジル、オーストラリア)に対して、合計10回の物資供与を実施しました。

3. 平時からの応急対応への備え

いざ大規模災害が発生した際に迅速かつ的確な支援を実施するためには、平時の備えが重要です。チーム派遣に関しては年間を通じて種々の研修・訓練を実施し、隊員候補者の能力強化を図っています。

国際連携に関しては国連人道問題調整事務所(UNOCHA)、WHOをはじめとした関係国際機関などとの連携強化を図っています。また、JICAの社会基盤部が主導するASEAN災害医療連携強化(ARCH)プロジェクトを通じて、ASEAN地域における災害医療の連携体制の構築と能力強化に貢献しています。

近年、世界で発生する自然災害は規模、件数ともに拡大傾向にあり、災害多発国として経験の多い日本の国際緊急援助は重要度を増しています。JDR事務局では応急対応から復旧・復興に向けたシームレスな支援の展開に向け、他部門との連携を強化しています。

モザンビーク 巨大サイクロン災害に対し包括的な緊急支援を展開

健康危機対応に大きく貢献



JDR医療チームによる診療活動の様子

JICAは、南半球最悪のサイクロン災害に見舞われたモザンビークに対して2019年3月～4月、JDR医療チームと専門家チームを派遣するとともに、救援活動の全体調整を担う国連災害評価調整チーム(UNDAC)に要員を派遣。緊急援助物資も供与しました。

医療チームは、陸路が寸断され医療支援が届いていなかった遠隔地区に野外診療所を開設、計794人を診療しました。患者の多くは呼吸器系の急性疾患や下痢を発症しており、さらにコレラ流行の兆しがあるなかで感染症への

対応が特に必要でした。

専門家チームは、緊急医療チーム調整本部(EMTCC)の運営を支援。日本が主導して開発した「災害医療情報の標準化手法(MDS)」を初めて稼働させ、被災地全体の診療動向の分析を通じて健康危機管理対応に大きく貢献しました。

JICAは、被災地での全体調整をするUNDAC、EMTCCと、現場での診療活動とで複層的な支援を展開しました。その経験と教訓を将来の大災害への対応に生かしていきます。